

河内大塚山 古墳紀行



世界遺産の
「百舌古墳群」と
「古布古墳群」の
中、丹北野に立地した
河内大塚山古墳の
築造から近世・近代の
変遷を知る

著者	書名	発行年	被葬者の記述
三田浄久	「河内地名所記」	延宝7年(1679)	「阿保親王御廟 大塚と云山也」
貞原益軒	「南游紀行」	正徳3年(1713)	「其乾に小き山遠くみゆ。王塚山と號す。是阿保親王の墳なり。保の寺、おとよむべし。其邊に阿保村あり」
寺嶋貞安	「河内三才図会」	正徳3年(1713)	「阿保親王墓 在大塚山」
寺田貞正・ 神田祐世	「河内志」	享保20年(1735)	「雄生山岡上墓 来目皇子 在大塚村」
谷川士青	「日本書紀通鑑」	宝暦2年(1752)	「来目皇子 河内雄生山岡上 在丹北郡大塚村」
秋里龍崎	「河内名所図会」	享和元年(1801)	「来目皇子塚(河内志)に、丹北郡大塚村にありとしるせり」(覽跡師云、此皇子の塚は、「河内志」に、丹北郡大塚村に存すと。然れども、雄生山の岡上といはんには、是ならず)「土人、此塚を阿保親王といふは謬也。按るに、一津屋村に荒塚あり、字を御墓といふ。これ、親王の塚ならん歟」
伴林光平	「河内国陸奥図」	文政12年(1829)	「雄生山岡上墓 阿保親王」
伴林光平	「野山のなげき」	文久2年(1862)	「河内国丹北郡なる大塚村の御廟山にて、神さがる御殿の松をたづまびてうき雲かゝる高麗が原」

江戸時代に記された河内大塚山古墳の被葬者 江戸時代には平安初期の阿保親王(平城天皇の皇子)や飛鳥時代の来目皇子(聖徳太子の弟)とされている。ただ、伴林光平は「野山のなげき」で高麗が原、つまり雄略天皇の丹比高麗原と推測している。

吉田東伍	「大日本地名辞書」 (富山版)	明治33年(1900)	(大塚) 書記通鑑之を以て、来目皇子雄生山岡上と為せど非なり。全く平地に在れば岡上と曰ふべからず、或疑ふ雄略天皇高麗原御殿に非ずやと、形状状大當時の墓勢を指示するに似たり。 (高麗原) 按に皇陵田徑古間に漏たず、其東少間にして又小墳あり、此数墓圖旧史謂ふ所の車人墓ならん。而も其真皇陵は此を距る西段南十五町、大塚山に覆す可きのみ。
------	--------------------	-------------	--

明治時代後半以降、5世紀後半の雄略天皇陵と考えられてきた。しかし、6世紀中頃～後半と考えられる河内大塚山古墳の年代に合わない。



「河内名所図会」に見る河内大塚山古墳(左上)

後部部に大塚社(菅原神社・天満宮)が祀られる。参道石段右下に巨石が見られる。下段には、5世紀前半に反正天皇が王宮(ミヤコ)とした丹比東宮跡に創建されたといえる麻羅神社が描かれる。



「河内地名所記」 阿保親王御廟とある。

「河内大塚山古墳の所在地」

墳丘の南北を走る中軸線を境に、西は松原市西大塚、東は羽曳野市南恵我之荘(旧・東大塚)に分かれている

【引用文献】

- 西田孝司 「河内大塚山古墳の内部構造―阿保親王墓取集―に見る「磨戸石」の記述から」(『ヒストリア』159号、大阪歴史学会、1998年)
- 西田孝司 「河内大塚山古墳と横穴式石室」(『古代学研究』143号、古代学研究会、1998年)
- 西田孝司 「河内大塚山古墳と陵墓参考地」(『松原史』第2巻、松原市、2008年)



「河内国陸奥図」阿保親王とある。

河内大塚山古墳は、古布古墳群の西端に位置するわが国で五番目の巨大前方後四隅である。墳丘は、東除川(西側に発達した)中位段丘面に築かれており、周囲に濠をめぐらせ、墳丘長三三五mを測る。徳令制下河内国丹比郡の地である。

前方部には江戸時代以降、丹北郡東大塚村の集落が形成され、境の丹北郡西大塚村の田畑も耕されおり、後四部には氏神社の大塚社(天満宮)が祀られていた。戦国時代には、土豪の丹下氏が丹下城を築いた。

築造年代は、(一)前方部が低平で大きく広がっていること、(二)明瞭な段差が見られず、後四部頂の平坦面が狭い、(三)遮り出しが設けられていないこと、(四)葺石の使用は不明であり、雄略の存在も明らかでないこと、(五)後四部中腹に、後期古墳の横穴式石室材と思われる「ぼ石」とよぶ巨石が露出して、ことごとく、江戸時代の阿保親王墓取集に、後四部東南に石室材を思わせる「石文磨戸」や「磨戸石」の石が開口していること、(六)近くの兼藤神社(上田)に移された手洗鉢や東大塚・天満宮遺跡に、所南恵我之荘の標石の台石、「百渡石」が横穴式石室や石棺の部と考えられる。以上のことから、古布古墳群最後の6世紀中頃から後半の築造とみられる。

被葬者は、天照天皇未完成成就や欽明天皇初葬説とがある。

河内大塚山古墳は、のら大正十年(一九二二)に国の史蹟指定を受け、同十四年(一九二五)には陸奥参考地となった。これに伴い、墳丘内にあった兼藤は、東大塚村側に移され(昭和一三年)、昭和九年(一九三四)に古墳の土地買収が完了した。昭和十六年(一九四二)には、史蹟指定が解除され、宮内省現宮内庁により、現在に至るまで管理が続けられている。



明治時代の河内大塚山古墳 イギリスのウィリアム・ゴランド撮影。



昭和12年(1937)の河内大塚山古墳 谷村為清氏撮影。

いずれも、現在のように樹木があまり見られない。



【河内大塚山古墳の案内板】
〔大塚山ライオンズクラブ〕2010～11年の
45周年記念に設置。



【河内大塚山古墳後部の巨石・ごぼ石】
〔大塚山史蹟名勝天然記念物調査報告
第五輯〕より、1934年）花岡内録者。



【紫羅神社安置の手洗鉢】
〔天満宮〕〔享和元年〕〔九月〕〔東大塚村氏
子〕とある。享和元年(1801)に石室材を転用
し奉納。黒雲母花崗岩。



【阿保親王取塚】〔文政8年〕(1825)に見える
「石之磨戸」〔磨戸石〕の表記(山口県文書館蔵)
右から5・7行目。



【大塚山参考地標石】
吾内舎が建てた河内大塚
山古墳の標石(昭和7年)
中央に〔大塚山参考地
標〕〔宮内省〕、左側に〔第
二入ルベカラス〕、裏面に〔建
て七年十月〕とある。



【東大塚天満宮 百歳石】
流紋岩貫孔結核灰岩。
いわゆる亀山古である。
〔百歳石〕〔天保十一年八
月吉日〕〔東大塚安兵衛〕
とある。
天保11年(1840)、東大
塚村の安兵衛が建てた。
石棺の転用。



【東大塚天満宮 遷葬所標石の台石】
(南恵我之柱) 黒雲母花崗岩。石室の転用。



【河内大塚山古墳】
〔河内大塚山古墳西大塚村跡地図(江戸時代後
半)〕江戸時代、墳丘は西大塚村農民の畑と
して耕作されていた。濠は西池、北池として、
一津屋村(松原市)や丹下村・西川村(羽曳野
市)の灌漑池であった。下が北。(個人蔵、部分)

【墳丘】〔松原市史〕第1巻より、1985年)
墳丘長335m、後円部直径185m、
後円部高20m、前方部幅225m、
前方部高5m。
徒歩20～30分で全周できる。



【大正15年(1926)の河内大塚山古墳の宮内省買上げの新聞記事】
前方部上に所在した民家や田畑などが豫墓参考地になったことに伴い、買上げられた。
(大正15年2月26日、大阪朝日新聞より)